

李光洙における「詩」の意味  
－未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）・  
『私の詩上』（『내 노래上』）を中心に－

Meaning of “Poetry” in Lee Gwangsu

－Unreleased poetry *My Poetry* ・ Focusing on *The upper half of My Poetry* －

李 侑珍

LEE Yujin

# 李光洙における「詩」の意味

## －未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）・『私の詩上』（『내 노래上』）を中心に－

### Meaning of “Poetry” in Lee Gwangsu

－Unreleased poetry *My Poetry* · Focusing on *The upper half of My Poetry*－

李 侑珍

LEE Yujin

요지: 본 논문은 이광수의 미발표시집 『내 노래』와 『내 노래上』을 중심으로 시에 대한 분석을 했다. 이광수는 식민지말기와 반민특위법으로 재판 중 병보석으로 나와 있던 시기 집중적으로 시를 썼다. 이광수가 시는 시인의 고백이며, 때때로 무슨 하소연을 하고 싶어서 시를 썼다고 말했던 것처럼 당시 자신이 처해 있었던 상황과 심경을 시를 통해서 토로하고 있었던 것을 알 수 있었다. 특히 가장 노골적으로 토로하고 있었던 「因果」・「나 1」・「나 2」・「구데기와 개미」는 해방후의 이광수를 이해하는데 있어서 중요한 자료라고 볼 수 있다.

キーワード: 李光洙、詩、未発表詩帖、植民地末期、解放

#### 1.はじめに

春園李光洙は、作家として活動した40年間多様なジャンルの作品を約900編も執筆した韓国文学史における代表的な文豪である。李光洙の作品は1917年に書かれた長編小説『無情』（同）が韓国近代小説の嚆矢として評価され、その後ベストセラーともいえる小説を次から次へと新聞に連載し、その業績によって小説にスポットライトが当てられ、小説家として評価され、研究も小説中心の研究が多く占めているのが事実である。

しかし、李光洙が韓国語で本格的に執筆を始めた1910年に書いた作品は詩が3編、小説が3編であり、1917年に『無情』（同）を書くまで詩は12編、小説は5編を書いた。そして、植民地末

期に犯した親日行為によって批判を受け、その非難を避けて田舎で蟄居していた時期、また解放後に反民族行為処罰法の裁判を受けていた、生まれて最もつらかった時期に集中的に書いたのも詩であった。このように詩を書いた時期と作品編数を考えると、李光洙にとって詩は、文学を始めた時期から文学者としての晩年にいたるまで小説と同時に書いたものであり、民族主義者から親日を犯した裏切り者へ転落したときに自分と向き合って書いたものでもあったといえる。そうなら、李光洙にとって詩も小説ほどの重要な意味を持つものであり、むしろ最もつらかった時期に集中的に書いたということから、特別な意味を持つものであったのではないかと思われる。

そのため、本稿では李光洙が書き続けていた詩と詩集を分析して、李光洙が「詩」をどのように認識しながら書き、何のために書いたのか、李光洙にとって「詩」はどのような意味を持つものであったのか考察する。

## 2. 研究目的と方法

上記のように李光洙は生涯にわたり数多くの詩を書き、詩集も出したが、詩の数と比べれば出した詩集は少ない。小説は新聞連載小説として発表し、再び単行本として、全集の形にして何回も出したことと比べればやはりその差が感じられる。

研究においても詩に対する研究は1980年代に集中的に行われ、90年代には散発的に研究論文が出ただけで、持続的な研究は行われていない。そして、研究の傾向も初期の詩に偏ったり、仏教思想や基督教思想の側面から分析したものが多いため、詩の全般的な研究というより、時期や内容において限られた範囲で研究されてきたといえる。そのため、李光洙の詩に対する研究は全時期にわたる全般的な研究と同時に、各時期における綿密な詩の分析が必要だと思われる。

その意味から本稿では、李光洙の詩と詩集を分析することで、まず、李光洙の「詩」に対する認識と「詩」を書く意味について考察し、李光洙がなぜ「詩」を書き続けながらも詩集は出さなかったのか、その理由とともに、李光洙にとって「詩」が持つ意味について考察する。

その出発点として、まず、李光洙はなぜ詩を書き続けながらも詩集はあまり出さなかったのかという疑問から出発したい。特に、李光洙は植民地末期と解放後に反民族行為処罰法によって裁判中に集中的に詩を書いたが、自分で製本したような形の詩帖を持っていたにもかかわらず出版はしなかった。その未発表詩帖が『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）である<sup>1</sup>。もちろん当時李光洙が置かれていた状況と事情を考えると詩集を出せるような状況ではなかったことも考

えられる。しかし、状況によって出せなかったのか、わざわざ出さなかったのかは分からない。もともと李光洙は詩集をあまり出さなかったことを考えると当時の状況のためだとは断言できない。そして、もし李光洙が詩集を出さなかったとするなら、李光洙は発表や詩集の形で世の中に出すこととは関係なく詩を書き続けていたと考えられる。そうなら李光洙は何のために詩を書きつづけ、その詩にはどのような内容と意味がはらんでいたのだろうか。

詩ジャンルとは抒情的に自我を通じて自意識の世界をより綿密に表現できるジャンルのため、小説とは異なる側面から詩人の内面世界を窺うことができる<sup>2</sup>。そうなら詩には作家の内面が読み取れるし、発表を考えないで書いた詩ならなおさら素直な作家の心境が書かれている可能性が高いのではないと思われる。読者を想定して書いた小説や論説文で常に説得しようと、指導しようと指導者の立場で論理的に思考しながら述べようとした李光洙を考えると、論理を排除してひそかに自分と向き合った時に書いた詩には確実に他のジャンルとは異なる意図で書かれたものだと推測できる。

以上の疑問から本稿では、植民地末期と解放後に集中的に書きつづけながらも出版しなかった未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）の詩集を中心に詩を分析する。まず、李光洙が全生涯にわたり出版した詩集を簡単に整理し、詩集を出す際に書いた文章を通じて、李光洙が「詩」についてどのような認識を持っていたのか考察する。

次に、出版した詩集と比較をしながら未発表詩帖の詩の内容を分析して、李光洙の心境を窺うことにする。その際に、李光洙が直接製本したと思われる詩帖の詩の配列と他の詩集における収録の有無について考察する。配列と収録の可否は詩の意味を分析する際に重要な手がかりになると思うからである。詩の配列によって李光洙が詩を書いた時期、そして、感じていたこと、重視していたこと、強調していたことが読み取れるだろう。収録の有無においてもなぜ収録しなかったのか、収録された詩と比較を通じてより深い李光洙の内面と詩の意味が解釈できるといえる。

以上の分析を通じて、李光洙にとって「詩」はどのような意味を持つものであり、「詩」を集中的に書いた理由と詩集を出さなかった理由を究明し、李光洙の晩年ともいえる時期に書いた未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）の意味と位置付けを明らかにしたい。

### 3. 李光洙と「詩」の意味

#### 3.1 李光洙と「詩集」

上記でも述べたように李光洙は、詩の数と比べれば詩集は少ない。1929年に金東煥と朱耀翰といっしょに出した『三人作・詩歌集』(同)(通称『三人詩歌集』、以下こちらを用いる)と、1940年に博文書館から出した『春園詩歌集』(同)、この2冊だけである。『春園詩歌集』(同)を出すときに書いた「詩歌集を出しながら」(「詩歌集을 내며」)という文章で、李光洙は「私は初めて詩集を出すことにしました」<sup>3</sup>と書いたため、彼自身は三人で出した詩集は「私の詩集」ではないと思っていたようだが<sup>4</sup>、1910年代と20年代の作品が56編おさめられている『三人詩歌集』(同)は、やはり李光洙の最初の詩集であるといえる。『春園詩歌集』(同)には、このうちの半数にあたる27編が再収録され、1930年代に雑誌『朝光』(同)、『三千里』(同)などに発表した詩と時調を中心として、全部で149編の作品がおさめてある。初出が未詳のものもあるが、それらも雑誌に一度発表されたものではないかと推測される。

李光洙が北朝鮮に拉致されて5年後の1955年、夫人の許英肅女史が文宣社から春園文庫④として『詩集サラン』(『詩集사랑』)を刊行した。李光洙自身が編んだとは書かれていないため、許英肅女史が残された原稿を整理して刊行したと推定される。『詩集サラン』(『詩集사랑』)には98編の作品が収められている。『春園詩歌集』(同)に収録されていた5編と<sup>5</sup>、1930年代に雑誌に発表された数編のほかは<sup>6</sup>、すべて解放後に書かれたものである。雑誌に発表されたことが確認されているのは「ウジとアリ」(「구데기와 개미」)(『希望』(『희망』)1, 1950.2)と「地球」(同)(『民藝』2-6, 1950.6)の2編のみである。

以上、李光洙の詩集と呼べるものは、巴人と耀翰と三人で出した1929年の『三人詩歌集』(同)、李光洙が唯一「私の詩集」と呼んだ1940年の『春園詩歌集』(同)、そして許英肅女史が遺稿をまとめて出した1955年の『詩集サラン』(『詩集사랑』)の3点ということになる。

1962年3月に三中堂の『李光洙全集』の刊行がはじまり、1963年4月に『李光洙全集15 三人詩歌集・春園詩歌集・詩集サラン他』(『李光洙全集15 三人詩歌集・春園詩歌集・詩集사랑外』)が出た。3つの詩集の名前が冠せられているが、詩集別に編集されているわけではない。詩集に収められた作品と、雑誌に発表された作品、合わせて353編を、1925年までを第1期、1945年の解放までを第2期、解放後を第3期として、時間順に並べるという編集方法をとっている<sup>7</sup>。ところで、その半年後の9月に出た『李光洙全集19 日記・黙想録・補遺(1)』には、さらに33編の詩が収録されていた。『李光洙全集』19の「後記」によると、全集刊行が始まったあとになっ

て見つかった資料があり、それらを載せるために19巻と20巻に「補遺篇」を設けたという<sup>8</sup>。  
「未発表詩」については次のように書かれている。

前で言及した通り本巻を編輯する中に春園先生宅の書齋で多くの未発表原稿を見つけた。

その中でも2巻の親筆詩帖は予想外の収穫であった。そして今回収穫した未発表詩はすべてここに書き写したものだ。

1巻は〈春園詩歌集〉(1940年2月博文書館版)白地製本で使われたもので、「清争行」・「門」・「病者の乞人」・「福」・「分らない恩恵」の5篇が載っている。これは詩歌集の發刊年代からみて1940年代(2月以後)の作品だ。もう1巻は菊判半切の厚い白地製本であるが、1948年から49年代のもので詩集〈サラン〉(1950年10月文宣社版)に發表されたものを除外した残りの28篇は本巻に収録した。<sup>9</sup>

『李光洙全集』19には、2つの親筆詩帖にある5編と28編の合計33編が収められており、どの詩も末尾には「未発表詩帖〈私の詩〉所載」「未発表詩帖〈내 노래〉所載」と記されている。

以上李光洙の詩は、2冊の詩集と、遺稿詩集、未発表詩帖2冊、『李光洙全集』15と19で中腹掲載されていたといえるが、詩の選別を誰がどのようにし、どの意味を持っていたのかは今後の課題としたい。

### 3.2 李光洙と「詩」

本章では、李光洙が詩集を出したときに言及した「詩」に対する文章を通じて「詩」についてどのような認識を持っていたのか確認する。

「詩」は世界に対する作家の主観的な認識が最もよく現れるジャンルである。叙事的自我は完成された経験の形態、簡潔したプロットを通じて提示されるが、抒情的な自我はストーリーなしにある特定の瞬間を通じて提示されるから<sup>10</sup>である。

李光洙は小説や紀行文の中でよく詩を挿入していた。代表的な近代長編小説『無情』(同)においても2編の詩が挿入され、その詩は後で題目がつけられて「夜明け」(「새벽」)と「スープに混せて召し上がって下さい」(「국에 마라 드립시다」)で詩集に収録される。『五道踏破旅行』(同)という紀行文にも「海雲臺で」(「海雲臺에서」)、「泗泚城で」(「泗泚城에서」)、「矗石樓で」(「矗石樓에서」)が挿入されており、他の「合浦風光」(同)、「東京求景記」(同)、「東京から京城まで」(「동경에서 경성까지」)、「止めどもない悲しみ」(「하음 없는 슬픔」)、「金剛山遊記」(同)の紀行文にも詩が挿入されている。

李光洙のこのような傾向を考えると、李光洙は紀行文のように自分の感情や感想を表す際に小説や紀行文などジャンルとは関係なく詩や時調を書いて表現していたことが分かる。すなわち、李光洙は「詩」の創作において「世界に対する作家の主観的な認識が最もよく現れるジャンル」という「詩」の特徴と、「抒情的な自我はストーリーなしにある特定の瞬間を通じて提示」という「詩」の書き方についてしっかりと理解して使っていたといえる。

李光洙は1940年に『春園詩歌集』(同)を出版する際に『毎日新報』に「詩」のジャンルについて次のように述べている。

詩はその詩人の告白だ。神の前でする偽りのない告白だ。旧約の詩篇だけではない、いわゆる詩は詩人の心情吐露だ。最初から吐露をしないであっても吐露する以上には真情でなければならないのが詩人の倫理である。詩人は詩で嘘をついてはいけない。それは神を欺くことである。なので、ある詩は直ちに詩を書いた人だ。小説や戯曲も詩だ。(中略)詩は宣言だ。満天下現在だけではなく、盡末來際までの衆生に送る手紙であり、宣言であり、遺言である。(下線筆者)<sup>11</sup>

上記の見解によると、李光洙は詩に対して「詩」は「詩人の告白」であり、「嘘のない心情吐露」だと考えており、「詩」はすなわち「詩人」だという「詩＝詩人」という見解を持っていたことが分かる。

そして、「詩」に対するこのような見解で書いた自分の詩に対して李光洙は『春園詩歌集』(同)の序文に次のように述べている。

私は私が詩人なのかどうか分かりません。しかし私は私のような低俗な人間が詩人になることはできないといつも思っています。清浄して純粋な魂の所有者ではない人がどうやって詩人になれるでしょうか。しかしながら私は詩を創りました。それが本当に詩なのかどうか分かりませんが、私は詩と思って創りました。時々何か打ち明けたくて考えながら書いておいたものが私の詩歌です。ただそれだけです。私は良い詩を創ろうと考えながら創ったことではありません。なので、私が詩を創ってから今まで30年に私の詩は読者に高く評価されたことがなく、批評家も私の詩なんかは知ろうともしないようでした。それにしても私は時々詩を創りました。このようなものを選んで、集めたものがこの詩集です。(下線筆者)<sup>12</sup>

李光洙の嘘のない自分の心情吐露のように書いた詩は、ただ打ち明けたくて書いたもので、決して良い詩を創ろうと、発表しようとしたものではない。このような「詩」に対する認識から、李光洙は詩を自分の感情に素直に書き、誰かに見せるためではなく、自分と向き合いながら自分

のために心情を吐露する心境で書いたものであったといえる。

このような認識ならば、李光洙がなぜ詩を書きつづけ、詩集を出さなかったのか窺える。そして、解放後に集中的に詩を書いたことは、当時李光洙がそれほど吐露しなければならない状況に置かれていたことの表出であり、どんな心境で書いていたのか想像しがたくない。

李光洙は解放後に詩を書きながら同時に『石の枕』（『돌베개』）という随筆を書いた。『石の枕』（『돌베개』）は李光洙の作品の中で最も高く評価された随筆として、1946年9月から1948年2月の間に書いたもので、序文には創作過程について次のように述べていた。

私は石壁に書く心情でこの文を書いたものであり、いつ出版することを予期したものではなかった。私がこの文を書くとき朴正浩君がそれを声を出して読んでくれて、私はその声を聴いた。これでこの文の目的は達成したことである。なので、随筆はお客さんの前に出すために必要な丹粧をしたものではなく、日常生活の姿そのままだ。私という一人の極めて平凡な生活で時々感じたことをさりげなく書いておいたものだ。（下線筆者）<sup>13</sup>

私が過去30余年内に数十巻の本を発表したが、この本のように私のものだと考えたものはなかった。数年前に『春園詩歌集』を出したことがあったが、その中にある数十編の時調が『石の枕』以外には私自身の本音を話したものであった。広い意味で考えると私が書いた文章は論説や論文も全部私の本音から出たもので私の人格の説明者だけど、この随筆とあの時調だけが一点一画が全部私の魂の写真だ。（下線筆者）<sup>14</sup>

『石の枕』（『돌베개』）の序文で当時李光洙が「詩」と「随筆」をどのような認識と心情で書いていたのか分かる。李光洙は少なくとも「詩」と「随筆」を書く際は誰かに読ませるためではなく、自分の率直な心境をただ素直に書きたくて書いたものであり、このように見せるための飾りがなく、真実が読まれるため多くの人々が感動し、高く評価してきたと思われる。同じ時期である1948年に書かれた李光洙の回顧録『私の告白』（『나의告白』）においても自分の親日行為に対して懺悔しながらも自分が言いたいことは繰り返して述べている姿から、解放後に書いた文章からはこれ以上非難を受けるようになっても自分が言わないといけなかったことは言うべきだと思っていた李光洙の意志と立場が窺える。

以上の李光洙の「詩」に対する認識と詩集の序文、同じ時期に書いた随筆の序文から、未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）がなぜ書かれ、なぜ発表されなかったのか、そして、李光洙はどのような心境で書いたのかを探ってみることにする。

#### 4. 未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）・『私の詩上』（『내 노래上』）

本章では、3章で分析した李光洙の「詩」に対する認識をもとに未発表詩帖『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）に李光洙はどのような詩を書き、その詩を書いた状況と心境を考えながら分析をする。

##### 4.1 『私の詩』（『내 노래』）の分析

『私の詩』（『내 노래』）は、『李光洙全集』19の「後記」にも書いているように、「清淨行」（同）・「門」（同）・「病気の乞人」（「病든 乞人」）・「福」（同）・「知らない恩恵」（「모르는 은혜」）の5篇の詩が手書きで書かれている。

『私の詩』（『내 노래』）に収録されている詩のタイトルと収録された詩集をまとめると、次の表のようである。

タイトル	種類	『私の詩』 （『내 노래』） 解放前に推定	『私の詩上』 （『내 노래上』） 1949	『詩集サラン』 （『詩集사랑』） 1955	『李光洙全集』 1963
知らない恩恵（모르는 은혜）	時調	○			○19-296
福（同）	時調	○			○19-295～296/
病気の乞人（病든 乞人）	時調	○			○19-294～295
門（同）	時調	○			○19-297～302
清淨行（同）	時調	○			○19-302～309

これらの詩は内容から見ても解放前の作品ではないかと思われる<sup>15</sup>。さらに、1940年に博文書館が500部限定で刊行した『春園詩歌集』（同）の白地本に書かれているため、この詩を書いたのが1940年ごろではないかと推測できる。

『私の詩』（『내 노래』）に載せられている詩5編は具体的な対象を示してはないが、感謝の気持ちを伝えたり、「貪慾の一生にも偶然善業して/自分も忘れた善業できた果報を知らず/富貴を自分の貪慾で得たと思い」（「福」（同））のように「因果応報」の論理を述べるなど、仏教思想をもとに修行の方法と教化を述べている。そして、「清淨行」（同）では「動物虫／全て悪心を離したら／現在直ちに極楽だ／これが報国ではなく何と言えるのか」と当時の植民地末期という時局とも結びつけて修行の意味を述べているなど、自分が置かれている状況でなければなら

なかったことに対して仏教思想と結びつけて意味付与をしていたことが分かる。

すなわち、李光洙は『私の詩』（『내 노래』）を書いたころも青年時代から主張し、指導してきた護国仏教論を用いて力説し、より絶実だった時期であったからこそ時調のジャンルにでも修行と時局の論理を一体化しながら、自分の親日行為に対する根拠を語っていたといえる。『私の詩』（『내 노래』）に収録されている詩は5編しかないが、当時李光洙の親日行為の論理をよく表している詩であり、そのために書いたと思われ、植民地末期の李光洙の行跡を理解する際に非常に重要な意味を持つ詩であるといえる。

#### 4.2 『私の詩上』（『내 노래上』）の分析

もう1つの未発表詩帖『私の詩上』（『내 노래上』）は、表紙左側に『私の詩上』（『내 노래上』）と縦に書かれ、右側に「今年の麦」（「올보리」）と作者の名前が記されて貼られている。詩帖の大きさやタイトルのつけ方から自家製本のように思われる。「今年の麦」（「올보리」）とは、李光洙が五山学校時代に使った号で、ちょうど『私の詩上』（『내 노래上』）と重なる時期である1948年に書いた回顧録である『私の告白』（『나의告白』）で「今年の麦」（「올보리」）の意味について回想している。

「私は孤舟という号を持っていたが、教師になってからは自称‘今年の麦’と言った。今年の麦とは美味しい穀物ではないが、他の穀物が出る前に飢えをしのぐための食糧である。私も良い食糧になるという野心を捨てて、急を要する時に臨時的に使われる今年の麦になろうということだった。」<sup>16</sup>

すなわち、李光洙は回顧録を書いた時と同じ心境で詩を書いていたと考えられ、解放後のこのとき、「今年の麦」（「올보리」）という号を使ったのが青年の時と同じ気持ちで、再びその心もちで生きたいという希望があったからではないかと思われる。

李光洙は反民族行為処罰法により1949年2月7日に逮捕され、3月4日に保釈された。『私の詩上』（『내 노래上』）の詩は、釈放後約3ヶ月のあいだに書かれたものとして、当時集中的に書いていたことが分かる。そして、日付がついた詩が多いことから、李光洙がこの日々をどのような心境で過ごしていたのか臨場感を持って知ることができる。

『私の詩上』（『내 노래上』）には総61編の詩が手書きされている。そのうち『詩集サラン』（『詩集사랑』）に掲載された作品と重複する30編は『李光洙全集』15に収められ、28編が『李光洙全集』19に収められ、残りの3編は『李光洙全集』に収録されないまま抜け落ちている。

『私の詩上』（『내 노래上』）に収録されている詩のタイトルと収録された詩集をまとめると、次の表のようである。

タイトル	種類		『私の詩上』 （『내 노래上』） 1949	『詩集サラン』 （『詩集사랑』） 1955	『李光朱全集』 1963
ピアノの音 （피아노 소리）			○		○19-257
咳（기침）		1948春作に推定	○	○57	○15-262 기침
世間（세상）			○		○19-258
一つの焚口（한 아궁이）			○		○19-259～260
なぜ（왜）			○	○	○15-257～258
敝令（따끔령）			○		○19-260～261
愛（사랑） （八二、五、二八白 岳山下）		1949.5.28作	○	○217	○15-223～231 〈一九四九・五・二八、 白岳山下〉
高麗磁器（同）			○		○19-261～262
ミノゴメ餅（개피떡）			○		○19-262～263
怖い日（무서운 날）			○		○19-264～265
無題（同）	時調		○		○19-296
愛（사랑） （四二八二、二、西大 門刑務所監房にて） （서대문 형무소감방에 서）		1949.2.作に推定	○ 日付無	○64 日付有	○15-200 〈一九四九・二・一〇、 서대문 형무소에 서〉
看守（간수） （四二八二、二、西大 門刑務所にて）（서대 문 형무소에서）		1949.2.作に推定	○ 日付無	○61 日付有	○15-201 〈一九四九・二、서대 문 형무소에 서〉
ガン（기러기）	散文詩	1954.9새벽	○	○206	○15-313～314
因果應報（同） （己丑三月十七日雨）		1949.3.17作	○	○63	○15-205 〈己丑 三・一七〉
因果（同）	散文詩		○		○19-265～267
あなた（임） （己丑三月十七日雨）		1949.3.17作	○	○44	○15-203 〈己丑 三・一七〉
あなたの名前（임이름） （己丑三月十七日雨）		1949.3.17作	○	○43	○15-202 〈己丑 三・一七〉
草翁（同）			○	○68	○15-264～265
柳樹人從江南來訪（同）	未完		○		全集未収

タイトル	種類		『私の詩上』 (『내 노래上』) 1949	『詩集サラン』 (『詩集사랑』) 1955	『李光洙全集』 1963
慈悲を失った心 (자비를 잃은 마음)	散文詩		○		○19-267~268
和平 (同)			○		○19-268~269
三番目の争い (셋째 싸움) (八二、四月十二)		1949.4.12作	○		○19-269 세째 싸움 〈八二、四、十二〉
ツツジ (진달래) (八二、四、一二)		1949.4.12作	○	○158 진달래	○15-208~209 진달래 〈一九四九・四・一二〉
その木なぜ折るの (그 나무 왜 꺾나) (八二、四、一二)		1949.4.12作	○	○	○15-207~208 〈一九四九・四・二〉
スマレ (오랑캐 꽃)			○	○	○15-293~294
完全 (완전)			○	○	○15-267~268
この間 (요새) (八二、四、二〇)		1949.4.20作	○	○ 괴로워라	○15-209~210 괴로워라 〈一九四九・四・二〇〉
光景 (광경)			○		○19-270
念願 (소원)			○	○79	○15-267
即興 (佛經普門品) (同)			○		全集未収
折枝 (同) (八二、四、二一)		1949.4.21作	○	○78	○15-210 〈一九四九・四・二一〉
意志 (의지)			○	○76	○15-266~267
二つの心 (두 마음)			○	○74	○15-265~266
僕 (1) (나 (1))			○		○19-271 나・1
僕 (2) (나 (2))			○		○19-272 나・2
妻の説教 (안혜의 설교) (八二・四・三〇)		1949.4.30作	○		○19-273 아내의 설교 〈四九・四・三〇〉
話 (이야기) (四二八二、一二、 「愛の東明王」を書いて (「사랑의東明王」을 쓰고))		1949.12作に推定	○ 日付無	○70 日付有	○15-240~241 〈一九四九・一二《사랑의東明王》을 쓰고〉
互いに (서로)			○	○148	○15-287
行く春 (가는 봄)	時調		○	○147	○15-454

タイトル	種類		『私の詩上』 ([『내 노래上』]) 1949	『詩集サラン』 ([『詩集사랑』]) 1955	『李光朱全集』 1963
どんな願い? (무슨 원?)	時調		○	○72 (시조세 머리)	○15-452~453 (시조세머리)
田舎風景 (시 골 풍 경) (思陵にて (思陵 에서))			○	○48	○15-258~259 〈思陵에서〉
愛と憎み (사랑과 미 움)			○		○19-274
安楽 (안락)			○	○101	○15-274~275
国打令 (나라 타령) (八二・五・三)		1949.5.3作	○		○19-275~278 〈四九・五・三〉
過年 (과년) (戊子 春)		1948春作に推定	○ 時期無	○59 時期有	○15-183~184 〈戊子 春〉
丁道令 (정도령)			○	○99	○15-273~274
愛 (사랑)			○		○19-278~279
心 (마음)			○		○19-279~280
あの日を眺めたら (저 해를 바라보니)			○		○19-280~281
なぜ生きる (왜 사나)			○		○19-281~283
解放 (同)			○		○19-283~284
なぜ争う (왜들 싸우 시오)			○		○19-285
住み良い世間 (살기 좋은 세상)			○		○19-286
支配者 (同)			○		○19-287~288
ウジとアリ (구더기와 개미) (八二、五月十八日)		1949.5.18作 1950.2希望1に発 表	○	○24	○15-214~222 구더기와 개미 〈一九四九・五・一八〉
古い花種 (묵은 꽃씨) (八二、五月十六日)		1949.5.16作	○	○170	○15-211~214 〈一九四九・五・一六 日〉
豊かに暮らせる国 (잘 살 수 있는 나라) (八二、五、一九)		1949.5.19作	○		○19-288~294 〈四九・五・一九〉
法華経 (同)			○		全集未収
神様 (하나님)			○ 最後3行脱落	○11 最後3行 あり	○15-248~252 最後3行あり
無題 尹直 (同)			○		○19-309 譯詩

詩集において詩がどのような順番で配置されているかは、作家や編集者の意図と意味が現われている重要な手がかりであると思われる。そのため、李光洙自身が製本したと思われる『私の詩上』（『내 노래上』）の詩の配置はとても重要な意味を持ち、詩の配置から彼の意図が窺えると考えられる。

そのため、本稿では詩の順番の配置通りに詩の内容を分析して、なぜその順番で配置したのか探してみる。李光洙が意図的に配置した詩をそのままの順番通りに読むと何が読まれるだろうか。より詩を理解できるようになり、李光洙が配置した意図も読み取れるのではないかと期待される。

次に、遺稿詩集ではあるが、『私の詩上』（『내 노래上』）と一番近い時期に出版された『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録されていない詩を取り上げ、それらの詩を重心に詩の内容を分析する。どのような詩が収録され、どのような詩が収録されなかったのかを調べ、当時李光洙が詩を書いた理由と心境、そしてなぜ収録しなかったのか、収録選別の基準は何であったのかについて考えてみる。このような分析を通じて李光洙にとってこれらの詩はどのような意味を持つものであり、『私の詩上』（『내 노래上』）が持つ意味とも結びつけて、解放後の李光洙の「詩」の意味について究明することを試みる。

#### 4.2.1 「詩」の配置の意味

上記でも述べたように『私の詩上』（『내 노래上』）には日付がついた詩が多く、総61編の内13編に創作の日付がつけられている。一番早い日にちが3月17日で、一番遅い日にちが5月28日である。日付の順番からみて詩の配置は書いた順番で、日付に沿って収録されていたことが分かる。しかし、7番目に収録されている「愛」（「사랑」）が一番遅い時期である5月28日に日付が書かれていること、さらに、この詩を書いたページのつなぎ目にテープが貼られているような跡があること、ページの右上に数字が書かれていることから詩帖を製本するときに詩の配置の順番を変えた可能性も考えられる。

また、20番目に収録されている「柳樹人從江南來訪」（同）も収録順番からすると3月17日から4月12日の間に書かれたものといえるが、「憶漢城」（同）（1951）によると柳樹人がソウルに訪問したのは5月3日であったと書かれているため、この詩も日付に沿った配置ではなく、意図的に配置を変えたといえる。

するなら、李光洙はなぜ詩の配置の順番を変えたのだろうか。そして、詩の配置の順番はどのような意味を持ち、どのような基準によって決められたのだろうか。

詩の配置の順番の意味を把握するためには、まず、配置の順番通りに詩を読むことであろう。

配置されている順番で詩の内容を分析するとどのような傾向と意味が読み取れるだろうか。

まず、『私の詩上』（『내 노래上』）の1番目と2番目に配置されている「ピアノの音」（「피아노 소리」）と「咳」（「기침」）は当時病保釈で家に戻っている李光洙が、悪くなっている健康状態で、病床で近所から聞こえるピアノの音を聞いていることや、咳で肉体的にも精神的にも苦勞している様子を書き、彼が『私の詩上』（『내 노래上』）を書き始めたころの状況を良く表している詩であるといえる。すなわち、李光洙は今自分がどのような状況で、どのように過ごしているのかを最初に配置することによって自分の近況を知らせていたといえる。

次に収録されている「世間」（「세상」）、「一つの焚口」（「한 아궁이」）、「なぜ」（「왜」）、「嚴令」（「따끔령」）では、当時の世態や風潮に対して次のように語っている。

世の中、騒がしいな／新聞が騒ぐと胸が高鳴る／（中略）憎しみとわめき声の騒がしい世の中／愛と和平の良い日も来るのかな（「世間」（「세상」））  
「皆さん、愛を少しだけ増やしましょう／皆さん、問い詰めを少しだけ減らしましょう」（「一つの焚口」（「한 아궁이」））  
「人はなぜ互いに憎むだろう／憎んでいる人は眠れず／憎まれる人は眠れるのに／憎む人は憎まれるのに」（「なぜ」（「왜」））  
「国の権力を自分の権力にし／国から給料をもらって自分の仕事をする人／その上、いかさまですと／食わせる国民はいるだろうか」（「嚴令」（「따끔령」））

混乱な世態と同じ人間として、民族としてお互いに嫌がり、憎悪する姿を非難し、慨嘆する内容が続けて書かれている。やはり自分の近況を知らせた後は、今世の中がどのようなになっているのか、「愛」と「憎悪」を強調しながらこれで大丈夫なのか心配を語っている。そして、このような世態が当時自分が置かれている状況と無関係ではないということを誰よりもよく知っていた李光洙の立場からは本当に慨嘆する世態であることは言うまでもない。その後も「この間」（「요새」）、「光景」（「광경」）、「念願」（「소원」）と「なぜ生きる」（「왜 사나」）、「解放」（同）、「なぜ争う」（「왜들 싸우시오」）、「住み良い世間」（「살기 좋은 세상」）、「支配者」（同）などで繰り返して世態に対する慨嘆と怨望を語っている。

西大門刑務所に収監されたときのことを思い出して「愛」（「사랑」）と「看守」（「간수」）2編を続けて書いて刑務所での経験と状況を語ったこれらの詩からも、同じ内容を繰り返して書いている李光洙の創作態度が見え、自分のことや自分の身の辺のことを主に書いていることから、当時李光洙がどのように過ごし、どのようなことに関心を持っていたのか窺うことができる。

「草翁」（同）、「柳樹人從江南來訪」（同）、「慈悲を失った心」（「자비를 잃은 마음」）、

「和平」(同)では、堂々と活躍していた時期を回想しながら過去を懐かしく書いていることが読み取れる。

小川の辺の草むらに／牛を飼い、草を食わせていた／その日が懐かしい（「草翁」  
(同)）

三十年前上海で親しくしていたのに／ハンヤンで会うともうお年寄りになって／天下の情勢を変えようとしていた雄志は昔と変わらないのに（「柳樹人從江南來訪」  
(同)）

昔、乱時でも避難所は見つかった（「慈悲を失った心」）（「자비를 잃은 마음」）  
どんなに和平が懐かしいことか／「泰平聖代」が懐かしい／憎まないで喧嘩しないで／ゆるゆる暮らす世上が懐かしい（「和平」(同)）

「柳樹人從江南來訪」(同)は上記にも言及したように、この詩を書いた日付が5月3日に推定されるが、そうすると詩の配置の順番から執筆の日付が合わない指摘した。李光洙は1919年日本で「2・8独立宣言文」を書いた後、朝鮮の独立運動を全世界に知らせるためという重大な役割を担って上海に亡命して活動し、その時期に在中独立運動家である柳基石（1905～1980）と出会って一緒に活動したことがあった。その彼が30年ぶりにソウルに来るということを聞いて上海時代の時を回想し、懐かしく思いながら書いた漢詩が「柳樹人從江南來訪」(同)である。彼と一緒に活動した時期は李光洙の人生の中で最も活発に活動した時期であり、独立運動家として、指導者として、知識者として名声を博した時期であった。そのような時期に出会った同志を30年が過ぎた今、すでにその気力も名声も失い、むしろ世間の非難を受けている李光洙の立場から考えると、その時が懐かしく、深い感懐にふけることは当然かも知れない。そのため、李光洙は「柳樹人從江南來訪」(同)を書く前後に過去に平穏だった、幸せだった時期を振り替えながら4編の詩を書き続けたのではないと思われる。

以上の詩の分析から、李光洙が「草翁」(同)、「柳樹人從江南來訪」(同)、「慈悲を失った心」(「자비를 잃은 마음」)、「和平」(同)を書いた時期は3月17日から4月12日の間ではなく、5月3月から5月28日の間に書いた可能性も考えられるため、正確な確認作業は今後の課題としたい。

以上、『私の詩上』（『내 노래上』）における詩の配置の順番は多少日付の順番と合わない場合はあったが、それらの詩を書いた順番通りに配置したため、前後の詩の内容を読むとより詩の内容が理解でき、それらの詩を書いた動機と心境が読み取れるといえる。

このように、並べている前後の詩の内容を分析することで、より詩の内容が理解でき、並べて

配置した理由と配置の順番の基準が見えてくる。「ツツジ」(「진달래」)、「その木なぜ折るの」(「그 나무 왜 꺾나」)、「スマレ」(「오랑캐 꽃」)、「完全」(「완전」)、「折枝」(同)においても「不細工な枝のさきに／不細工に咲いた一本二本(中略)それだから子供たちが見るや否や飛びつく」(「ツツジ」(「진달래」))、「乾いた土地だから／葉も小さく花も小さい／それでも失っていない／本来の色と香り」(「スマレ」(「오랑캐 꽃」))のように、惨めに見えてもそれにはそれなりの香りや光を出しているので愛されていることを語り、「子供たちよ／その木をなぜ折るの／子供たちの手の指、足の指をぼきんぼきん折ったら痛くないのか」(「その木なぜ折るの」(「그 나무 왜 꺾나」))のように、見るときは折らないで見ただけにしてくださいと頼みながら、いくら折られてもまた咲こうという強い意思があることを「結ばれたつぼみは／必ず咲く／決めた心だから」(「折枝」(同))のように繰り返して語っている。

このように木や花を題材にすることによって、春を迎えている花や木とは異なって、李光洙自身はまだ冬という心境も窺え、いくらみすばらしい存在であってもその意思を折ってはいけなく、折ろうとしている世間に対して咲こうと抱いている意志は変わらないという信念と怨望の気持ちが語りたくて続けて5編の詩を書いたのではないと思われる。

「心」(「마음」)と「あの日を眺めたら」(「저 해를 바라보니」)においても連作詩のように「心」(「마음」)では「なぜ人々は／太陽と月を学ばないだろう」と「太陽と月」の話をしながら太陽の心を学ぶことを語り、「あの日を眺めたら」(「저 해를 바라보니」)では「あの太陽を眺めると／空中に浮いていて／平等に万物に／光を与え、熱を与える」と、具体的に「太陽」の慈悲と皆に平等に施すことを礼賛している。これらの2編の詩も「太陽」のような「心」を抱くことを連作詩のような形で書いたといえるが、当時李光洙は病床で自然と接しながら自然の理知、世間の理知を自分の人生と当時の立場をオーバーラップしながら納得していたようで、このような自然の教えからこの2編を書いたのではないかと解釈できる。

最後に同じ日に何篇も書いた時もあったが、3月17日の雨の日に4編の詩を書いた。「因果応報」(同)と長詩「因果」(同)<sup>17</sup>、「あなた」(「임」)、「あなたの名前」(「임이름」)である。これらの詩は『私の詩上』(『내 노래上』)の詩の中で「因果応報」の理知と神に依存する切迫な心境が最も露骨的に書かれている詩として、このような切迫な心境があったから書かないといけないという緊迫感で1日に4篇も書かせたのではないと思われる。

以上、詩の配置の意味において、詩はほとんど詩を書いた日付に沿って配置されたが、何編は日付とは合わない配置をされたことがあり、このような詩は前後に配置されている詩の内容の分析を通じて、それらの詩の解釈と配置の意味を知ることができた。李光洙は3ヶ月という短い期

間に集中して詩を書いており、詩の内容においては同じ内容の詩を繰り返して書いていたことから、当時の李光洙の一日が窺えることもできた。そして、同じ内容の詩が前後に配置されていることから、数日に何篇も書いたことが分かり、配置はそれらを書いた時期を中心に配置されたことが確認できた。同じ内容を繰り返して書いた理由としては、当時李光洙が置かれていた立場から離れては考えられず、自分の身辺に関すること、世間に対する不満と怨望の内容が多かったため、解放後という大きな環境の変化に対する李光洙の心境と対処方案を考えながら書いた「告白」と「心情の吐露」ではなかったのかと思われる。

#### 4. 2. 2 未収録詩の意味

『私の詩上』（『내 노래上』）には『李光洙全集』には収録されているが、一番近い時期に出した『詩集サラン』（『詩集사랑』）には収録されていない未収録の詩がある。『詩集サラン』（『詩集사랑』）は3章でも言及したように、李光洙が北朝鮮に拉致されて5年後の1955年、夫人の許英肅女史が文宣社から春園文庫④として刊行した詩集である。李光洙自身が編んだとは書かれていないため、許英肅女史が残された原稿を整理して刊行したと推定される。『詩集サラン』（『詩集사랑』）には98編の作品が収められているが、『春園詩歌集』（同）に収録されていた5編と、1930年代に雑誌に発表された数編のほかは、すべて解放後に書かれたものである。

『詩集サラン』（『詩集사랑』）での詩の並べ方はかなり恣意的なうえ、詩の選別においても許英肅の意志や、李光洙の最後の意志であったことを知っていて収録したと思われる。そのため、『私の詩上』（『내 노래上』）の中『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録されていなかった詩は単純に抜け落ちたとは思わず、何かの理由によって収録されなかった可能性が高い。例えば、最後の詩「神様」（「하나님」）では、滅亡の道を歩もうとしている世界のために、「私でも前に出て話さないといけませんか」と神に向かって叫びながら終わる。しかし、許英肅が編纂した『詩集サラン』（『詩集사랑』）では「神様」（「하나님」）が最初に置かれていることから、許英肅もこの詩が李光洙の最後の意志を語った詩であったことを知っていたため最初に収録したと考えられる。すなわち、詩の収録の順番や収録選別において許英肅の意志はもちろん、李光洙の最後の意志も現れていると推測できる。

『私の詩上』（『내 노래上』）の中『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録されていない詩は27編ある。その中で本章では、同じ日に書いたにもかかわらず1編だけ収録されなかった「因果」（同）と同じタイトルであり、続けて収録されている「僕1」（「나1」）、「僕2」（「나2」）、「妻の説教」（「안해의 설교」）の詩を中心に探ってみる。

さらに、『私の詩上』（『내 노래上』）の中唯一雑誌に発表された詩として、解放後1950年2月に『希望』という雑誌に発表した長詩「ウジとアリ」（「구더기와 개미」）と内容の比較を行い、収録はもちろん、雑誌に発表までされた理由を考えてみる。

まず、「因果」（同）は「しかし私は憎いです－因果の理法を、力の不滅を」で始まる長詩である。「因果」（同）は上記でも言及したように、3月17日の雨の日に「因果応報」（同）、「あなた」（「임」）、「あなたの名前」（「임이름」）と一緒に書いた詩である。しかし、4編の詩の中で『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録されなかった詩は「因果」（同）だけである。なぜ同じ日に書いた3編の詩は収録されているのに、この詩だけが収録されなかったのだろうか。

「因果」（同）は、親日行為による裏切り者として裁判と批判を受け、自分の命のように愛していた民族から冷静に懺悔を要求されていた時期に書いた詩である。李光洙は生の理知を常に「因果応報」の原理によって納得し、信念として信じていた人であったが、今度は自分がその「因果応報」によって罰を受けることとなっていた。しかし、李光洙はなぜ自分が罰を受けないといけないのか納得がいかなかったようである。むしろ自分は「因果応報」によって褒められるべきだと考えていたともいえる。しかし、容赦しない世間の罰の「応報」に李光洙は地獄を感じていたといえる。このような心境が最も露骨的に書かれていた詩が「因果」（同）であり、長文にわたり露骨に自分の心境を告げていたといえる。

しかし、このような李光洙の心境をよく知っていた許英肅すら世間の視線と批判を耐える自信がなく、同じ日に書いた詩にもかかわらず「因果」（同）だけは意図的に収録をしなかったと推測できる。

さらに、「僕1」（「나1」）と「僕2」（「나2」）は、タイトルから「李光洙」が連想され、詩の内容においても自暴自棄のような内容で、もう生きることに何の未練もなく、流れる方向に任せるといった心境が書かれていることが読み取れる。

僕、何を求めよう／求めるもの、一つもない／残り僅かな命／何を求めよう  
僕、ここに生きている／死のうとしても死ねず／生きてはいるものの／望むものは一つもない  
嬉しいことがあろうか／悲しいことすらない／来るものふさがない僕だから／世を去ることにも従える（「僕1」（「나1」））

「僕2」（「나2」）には「一生慈悲の道を楽しみ、他人にあげようとしたが出した私の手は毎回噛まれた蹴られた」と今まで自分がやった慈悲の善行がむしろ非難されていたことを露骨に打

ち明けている。すなわち、「僕1」（「나1」）と「僕2」（「나2」）には「因果」（同）と同じく慈悲の心で、恩恵を施す心情で生きてきた自分に結局戻ってきたのは「応報」で、もう何の希望もなく、罰だけを与えようとしている世間に慨嘆と人生の虚しさを切実に語っている。

「妻の説教」（「안해의 설교」）においても犠牲とされる夫と犠牲とする妻に例えながら、自分の置かれている状況を語っているといえる。李光洙は常に民族に対する愛は民族のために自分を犠牲することで成し遂げることができると思っていた。むしろ自分だけを考えることは墮落だと思っていた李光洙の信念から考えると、「妻の説教」（「안해의 설교」）は今まで自分が民族のためにやってきた犠牲の意味について苦悶していることが窺える。

以上『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録されなかった4編の詩は『私の詩上』（『내 노래上』）の中で最も李光洙の心境を露骨に告白したものとして、タイトルからもその心境を十分読み取ることができ、「何か打ち明けたくて考えながら書いて」<sup>18</sup>いた真心を披歴した詩であることを知っていたからこそむしろ『詩集サラン』（『詩集사랑』）に収録することはできなかったと思われる。

一方、『私の詩上』（『내 노래上』）の中唯一雑誌に発表した「ウジとアリ」（「구데기와 개미」）は日本統治時代に自分が犯した対日協力を詩に形象化した長詩である。孵化するために下水から出たウジが、アリに襲われたあと、自らの間違った選択により2度もアリの巣に入りこんで満身創痕になり、最後はアリの巣に引きずりこまれていくという話で、李光洙はこれを翌年2月に『希望』創刊号に発表している。

すなわち、「ウジとアリ」（「구데기와 개미」）は結局自分が平穩に、安全にいられる巣を探しに出た「巣探し」が主なモチーフとして、李光洙は『私の詩上』（『내 노래上』）の配置上「ウジとアリ」（「구데기와 개미」）より4番目の先の詩「解放」（同）においても「家」に対して語っており、「家を建てる人も私で」、「一旦家に入って住むようになったらその家の支配を受けないといけないことも私で」、「しかし、自分が建てた家が良い家だった、正しかったと断言できるのか」と問いかけている。「解放」（同）というタイトルから自分が選択したこと、選択した以上それに従わなければならなかったこと、しかし、その選択が間違う時もあるということを「家」に例えて語っている。

この2編で語っている「家」の意味から考えると、ウジが2度も間違ってアリの巣に入ってしまった、噛まれたり、蹴られたりしてアリの支配を受け、結局自分の選択が間違ったと分かったときはもう何の力も残っていない状態で、またアリにつられて支配を受けるしかない悲惨な状況を述べているといえる。そして、アリが2度も間違って選択したようにみんな自分の選択が正しい

と思っているが、実はそうではないということを「解放」(同)を通じて敷衍していると解釈できる。

以上、「ウジとアリ」(「구테기와 개미」)はウジとアリに例えて「巢探し」の苦行と試練を語っているが、李光洙が植民地末期に犯した選択の間違いを告白している詩として、しかし、誰でも間違った選択はあり得ることで、みんな自分は間違っていないと間違っているだけであり、間違ったと分かっても何もできないこともあるという自己弁明をするための詩であり、そのために発表が必要だったといえる。

## 5. おわりに

本稿では李光洙が書き続けていた詩と詩集を分析して、李光洙が「詩」をどのように認識しながら書き、何のために書いたのか、李光洙にとって「詩」はどのような意味を持つものであったのか考察した。

李光洙は生涯にわたり数多くの詩を書き、詩集も出したが、詩の数と比べれば出した詩集は少ない。しかし、李光洙にとって「詩」は、自分の感情を素直に書くものであり、誰かに見せるためではなく、自分と向き合いながら自分のために心情を吐露するものであったことが分かった。

植民地末期と解放後に集中的に書きつづけながらも出版しなかった未発表詩帖『私の詩』(『내 노래』)と『私の詩上』(『내 노래上』)の詩集を中心に分析した結果、李光洙にとって「詩」は解放後という大きな環境の変化に対する李光洙の心境と対処方案を考えながら書いた「告白」と「心情の吐露」であったといえる。

さらに、『詩集サラン』(『詩集사랑』)に収録されなかった4編の詩は『私の詩上』(『내 노래上』)の中で最も李光洙の心境を露骨に告白したものとして、タイトルからもその心境を十分読み取ることができ、何か打ち明けたくて考えながら書いた真心を披歴した詩であることを知っていたからこそむしろ『詩集サラン』(『詩集사랑』)に収録することはできなかったと解釈できる。

今後はより綿密な分析を通じて、李光洙の晩年ともいえる1949年と50年の彼の心境を明らかにしていくことを課題とする。

注

- 1 李光洙の未発表詩帖2冊『私の詩』（『내 노래』）と『私の詩上』（『내 노래上』）は東京外国語大学中央図書館の貴重図書として所蔵されているのが発見され、2017年筆者と共著で資料集『李光洙肉筆詩帖『私の詩』と『私の詩上』』（『이광수 친필 시집 『내 노래』, 『내 노래上』』）ソナム、2017を出版した。
- 2 床ヨンスン「解放期李光洙の詩研究」（「해방기 이광수의 시 연구」）『韓国文芸批評研究37号』2012, p53.
- 3 「詩歌集を出しながら」（「詩歌集을 내며」）『博文書館』1939.6 『李光洙全集』16, 三中堂, 1964, p.312
- 4 「詩歌集を出しながら」（「詩歌集을 내며」）を書いた1939年に永昌書館から「春園李光洙傑作選集第2巻」として『隨筆と詩歌』（『隨筆과詩歌』）が出ているが、選集の1巻で、隨筆、紀行文、日記まで入っており、収録された詩と時調のほとんどが『三人詩歌集』（同）と『春園詩歌集』（同）に入っているものなので、本稿では詩集として扱わない。
- 5 『春園詩歌集』（同）に入っているのは「即興」（同）、「彰義門で」（「彰義門에서」）、「送った後」（「보낸 뒤」）の時調3編と「鳩」（「비둘기」）、「鉄の鐘」（「쇠북」）の詩2編である。
- 6 1930年代に雑誌に発表されたものは、「車中で」（「車中에서」）（新人文學）、「大同江」（同）、「力の賛美」（「힘의 찬미」）（東光）である。
- 7 収録数は全部で353編（タイトルで集計）。うちわけ〔詩〕第1期=47編、第2期=56編、第3期=88編〔時調〕第1期=59編、第2期=65編、第3期=6編、〔歌謡・民謡・童謡・漢詩・英詩・訳詩〕32編。
- 8 『李光洙全集』19, 三中堂, 1964, p432。この号の後記は盧琅煥氏が執筆している。
- 9 同上, p439.
- 10 金ジュンオ『文學史とジャンル』（『문학사와 장르』）文學と知性社, 2000, p142.
- 11 李光洙「文學瑣言－文學と眞実性」（「문학 瑣言－문학과 진실성」）『毎日新報』1940. 2.13～2.16 『李光洙全集』16, 三中堂, 1964, p254.
- 12 李光洙「私の詩歌」（「내 시歌」）『春園詩歌集』序文, 博文書館, 1940, p1.
- 13 李光洙『石の枕』（『돌베개』）序文, 『李光洙全集』20, 三中堂, 1964, p328～329.
- 14 同上, p331.
- 15 波田野は解放前に書いたと推定する根拠として、解放後に李光洙が書いた詩はほとんどハングル専用で書かれているが、「知らない恩恵」（「모르는 은혜」）以外の詩では漢字が多用されていること、「病者の乞人」（「병든乞人」）はある年の2月5日に自宅に現われた病気の乞食を「和光医院」に送る話だが、解放以後の2月5日に李光洙が自宅でそのような経験ができる状況ではなかったと思われるため、解放前に書かれたと述べている。

- 16 李光洙『私の告白』（『나의 告白』），『李光洙全集』13，三中堂，1964，p193.
- 17 このタイトルは『李光洙全集』の編集者であった盧琅煥氏がつけたものである。タイトルがないために盧琅煥氏がつけたものはこのほかにもいくつかある。鉛筆で書かれているものはもともとタイトルがないもので、内容を見て自分でつけたと言っている。新しくつけられたタイトルは鉛筆で書かれているので知ることができる。
- 18 李光洙「私の詩歌」（「내 詩歌」）『春園詩歌集』序文，博文書館，1940，p1.

## 参考文献

### 基本資料

- 『李光洙全集』15 三中堂，1964.
- 『李光洙全集』19 三中堂，1964.
- 『毎日新報』・『三人作・詩歌集』（（同）通称『三人詩歌集』）・『隨筆と詩歌』（『隨筆과 詩歌』）・『春園詩歌集』（同）
- 『李光洙肉筆詩帖『私の詩』、『私の詩上』（『이광수 친필 시첩『내 노래』,『내 노래上』）
- 金ヘソン「春園詩歌に現われている仏教思想研究」（「춘원시가에 나타난 불교사상 연구」）『月刊文学』8巻10号，1975.
- 都春吉「春園の詩とその価値」（「춘원의 시와 그 가치」）『わが語文研究』，1985.
- 姜スギル「春園の初期詩考」（「춘원의 초기시고」）『韓国国語教育論文集』，1989.
- 金龍植『韓国近代詩史』上（『한국근대시사』상）学研社，1991.
- 金允植『李光洙とその時代』（『이광수와 그의 시대』）ソル出版社，1999.
- 金ジュンオ『文学史とジャンル』（『문학사와 장르』）文学と知性社，2000.
- 崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』（『식민지시기 민족 지성과 문화운동』）ハヌルアカデミー，2003.
- 金ジェグァン「1910年代韓国近代小説研究：李光洙を中心に」（「1910년대 한국근대소설연구：이광수를 중심으로」）檀国大大学院博士学位論文，2004.
- 金東明「日本帝国支配下李光洙の民族アイデンティティ性」（「일본제국지배하 이광수의 민족아이덴티티성」）ソウル大大学院修士学位論文，2007.
- 李ハヌル「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」（「상해판『독립신문』의 발간주체와 성격」）成均館大学史學科修士学位論文，2008.
- 波多野節子『『無情』を読む』（『『무정』을 읽는다』）ソミョン出版，2008.

波多野節子『韓国近代文学の祖と‘親日’の烙印』中央公論新社, 2015.

